

月報

<457号>

ケルン・ボン日本語
キリスト教会
二〇二三年五月一日

「みなしごにはしなご」

佐々木 良子

私たちの希望の源であるイエスさまのご復活を、昨年と同様にブリュッセル日本語プロテスタント教会の皆さまがケルンにいらっしやうり、一緒に祝いしました。今年は更に特別なイースターとなりました。

ブリュッセルのメンバーであるA姉妹が、お母様の母教会であり、又、おじいさま、おばあさまが通っておられる日本のG教会にて洗礼を受けられました。彼女も日本に一時帰国の際には、ご家族の方々と一緒にその教会に通っておられ、皆様から愛され祈られている姉妹ですから、G教会に關係する方々も、格別の喜びとなりました。

姉妹は昨年の夏、南ドイツで行われた「ヨーロッパ・キリスト者の集い」に参加して、受洗の思いが与えられました。ブリュッセルは一昨年から常駐の牧師がおりません。一人の魂の救いが与えられても、ごこの教会で洗礼を受けたら良いのかと、皆さんで祈りながら主の最善を求めました。そうして、受洗準備の学びは、ブリュッセルの教会と関わりをもっているケルンで、洗礼式はご家族との関わりのある日本の教会で、という導きのもと、G教会との連携を取りながら、洗礼式に向かっの歩みが整って参りました。

正に何処であろうとも、どのような状況であろうと、一人の魂を主はみなしごにはなさいませぬ。更にコロナ禍の時、オンラインというツールを様々な面で活用できることを経験したので、この

ような道をも開かれました。また、G教会は私が日本の前任教会にいた時、様々な面で親しくお交わりがあったので、スムーズに連携が取れました。ここまでに至った全ての過程は、聖霊なる神様のお働きのゆえです。

日本との時差は、現在七時間です。私たちが礼拝をお捧げする時間帯には、A姉は既に受洗して新しく生まれ変わっていました。私たちが捧げるケルンでの礼拝前にスカイプを通してご報告を受け、ブリュッセルのメンバーとケルンのメンバーの一同が、喜びに包まれた中で、ケルンでのイースター礼拝が始まりました。

受洗準備会の時、A姉が、「これからはイエスさまがいつも一緒に嬉ししいし安心です。」と仰いました。神さまの生き生きとしたご臨在、そのものに包まれていました。

現在、「人生は八〇年、否、一〇〇年時代」に入っていると言われています。A姉はまだ二〇代ですから、これからの長い人生を、「ひとりではない」という安心感をもって歩める姉妹を、イエスさまは、「このような人はさいわいである!!!」と、仰っていることでしょう。私たちの人生において、そのような幸せを見出すことができました。幸いです。

A姉がそのような思いを抱くことができたのは、彼女が唯、漠然と考えて思ったではありません。信じているならイエスさまがおられる、というその人のイメージや知識でもありません。また、気休めや思いこみでもありません。文字通り、イエスさまが共にいらっしゃるのです。

神さまは、イエス・キリストというお方においてこの世に来てくださいました。イエスさまは、「インマヌエル」と呼ばれ、「神、われらとともにいます。」ということなのです。ですから復活されたイエスさまが、世の終わりまで私たちのところ

に留まってくたさるから私たちは「みなしご」にはならないのです。

十字架にお架かりになったイエスさまは、死の力に飲み込まれて滅びたのではなく、三日目の日曜日に復活され、その後、四〇日に亘って弟子たちにご自身を示され、それから天に昇られ、現在、イエスさまはこの地上にはおられなくなり、お姿をこの目で見ることはできなくなりました。

しかし、十字架を前に最後の晩餐の席で、「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。」(ヨハネによる福音書一四章一八節)と、イエスさまは一一弟子たちに愛を示し、彼らを励まされました。そのお約束として、イエスさまはお語りになりました。「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。」(ヨハネによる福音書一四章一六節)。

別の弁護者とは、「助け主・助け手・援助者・慰め主」と訳されていますが、傍らにいてくださるお方です。この根拠に「みなしごにはしておかない。」と、約束してくださいませ。

わたしたちが何をしようかと、どこにいても、イエスさまが共にいてくださるのです。これが私たちの信仰です。



4月9日 イースター礼拝
ブリュッセル日本語教会の方々と合同礼拝

世の光が消えた一瞬を思う

グルーベ道子

今年の受難週の五日目(木)と六日目(金)には地元の教会に出席することができ、三十人足らずの方々と礼拝のひと時を共にしました。その中でも受難日の十一時からの礼拝で今までにない深い経験を見せていただきました。

礼拝は、奏楽も讃美歌もバッハの「血しおしたる」が使われ、数多い編曲を一つひとつ独特のオルガンの奏でる音色で、朗読される聖句を表現していたように受け止められました。その礼拝の最後に牧師が「これからこの講壇に備えられているものを奏楽に添って全部持ち去りますので皆さんは着席のまま見守ってください。」と告げられました。

すると先ず大きな聖書が厳かに取り上げられ礼拝堂を去り、続いて火の点されていない六本の葡萄色の蠟燭が二本ずつ、そして最後に聖書の置かれていた台とそれを覆う黒のビロードの十字架を縫い付けてある垂れ幕のようなカバーが教会員の方々によって静かにオルガンの音に合わせて持ち去られました。オルガン演奏が終わると同時にこの式も終了しました。私たちの目の前には、灰色の裸の石の聖壇とローソクのない六本のローソク立てがある間の講壇でした。

それを見ていた私はドキッとしました。思わず十字架上のイエス様の言葉を思わずにはいられませんでした。「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」。一瞬イエス様が神様から離された瞬間を感じ取りました。私の前から神様が取り去られたのです。神様をいつも私の前に置こうと願い、今まで在って当たり前であった聖書の御言葉と世の光である方が私の前から取り去られた瞬間でした。そこには恐れと迷いを持つ方向音痴の子羊の自分でした。今思うと

この式はイエス様が十字架につけられて地上が暗くなった十二時に始まったことでした。この式の後は後奏もなく、教会の鐘の響きもなく、シーンとした教会堂を去っていく私たちだけでした。

四年ぶりの休暇を終えて

金ジョンホ・金ソウン

私たちは今回四年ぶりに韓国へ行ってきました。ドイツに来てから初めての訪問でした。ワクワクの気持ちとハードなスケジュールで緊張を持ちつつ故郷へ向かいました。

今回私たちの移動距離は長くて私の両親が住んでいるカンヌンという所と夫の両親のいる釜山(移動時間約五時間)、またソウルそして福岡まで回る大変なスケジュールにも拘わらず、神様は行く所々恵みを与えてくださり、私たちがこれから主の前でどのように生きるべきかを教えて頂いた大切な時間でした。

韓国はちょうど桜が満開した時期だったので、どこに行っても美しい桜や色々な春の自然を感じられました。空港から真っ直ぐ両親のいるカンヌンへ向かいました。両親は小さい町で牧会をしておりますからおよそ五年間、毎日礼拝を捧げています。教会には時間に捕らわれず、いつも人々が訪ねて来ました。教会のそばで住んでいる両親はその方たちに毎回食事を提供して信仰の話、イエス様の話をして体と霊を豊かにしていました。

両親は私が一歳の時から牧会をしていましたが、そのような牧会の姿は見た事がなかったです。両親ももっと深い主の恵みが与えられて行われているんだと言いました。自分自身の力ではない主の力で礼拝や奉仕だから高齢の二人に人に仕える能力が与えられているとはっきり感じる事ができました。

真理を伝えていくみ言葉を聞くために、一生懸命純粋な気持ちで礼拝の場に集っている信徒たちを見てみると、もう一度胸が熱くなりました。久々の韓国語の賛美にも胸の奥深く恵まれました。

次は義理の両親がいる釜山へ行きました。義理の両親はまだイエス様を信じていないので、私の両親から伝道の願いを託されて向かいました。義理の両親は本当に優しく、私が釜山に住んでいたころから仲良くさせていただきました。

その為か当時から余計にイエス様を伝えるのが難しかったです。既に長年夫が一生懸命伝えたにもかかわらず、未だに色々なクリスチャンを名乗る人々の正しくない姿や模範を示さない姿のためにイエス様を知ろうともしない状態でした。勿論、私も含めてだと思いました。それでも、人々はそうでもイエス様は本当に良い方で、その方を通じないと魂は救われないことを時間のあやに伝えようと頑張りました。夫とこれからは神様に任せて私たちはお祈りしようと話し合いました。

釜山にいる間、短い時間の間を縫って福岡に行ってきました。福岡に行くと言ったら、夫の一〇年前からの知り合いの日本人の方が、わざわざ集まってくれました。普段、ケルンの教会で日本語を使



午後礼拝の様子(カンヌン安昌教会)

っているお陰か、スムーズに会話しながら五人の日本の方達と楽しい時間を過ごせました。少しですがキリスト教についても話して持ちました。日本には未だにキリスト教やイエス様に

ついて知らない人たちが多いということをもう一度実感し、自分たちに与えられた使命についてもっと深く胸に刻む時間となったことに感謝でした。

再び釜山に戻ってきて、以前出席していた教会でイースター礼拝を捧げました。コロナで信徒が減ったのではないかと心配もありましたが、以前と変わらない信徒たちの集まりを見て本当に嬉しかったです。

今回の休暇には色々な主の導きと備えがありました。どこへ行っても主の御手を感じられ、これからの生き様をも再整備できる時間でした。最も嬉しかったのは、どこに行ってもお祈りをしてくださるという方たちに出会ったことです。

私たちの事情や状態を知らなくてもお祈りをしてくださることを約束していただいたのが一番強い応援でした。

ギクシヤクしていた関係も回復してくださりこれからドイツで生きていく力も沢山いただきました。勿論、毎日自分たちで言葉とお祈りをもって、主の力を得なければならぬことも忘れず、またこれからの時間を生きていきたいと思えます。



イースター礼拝の様子と洗礼式
(シンピョン口教会)

三年振りの宣教報告

—日本で宣教報告が必要な理由—

佐々木良子牧師

私は、二〇一六年四月に、「日本基督教団・派遣宣教師」として、現在の教会に遣わされて参りました。派遣されるにあたっての条件は、日本で「支援会」を作ることでした。それはドイツでの宣教のための物心共に満たされるためでした。

教会の方々には、様々な面で精一杯支えてくださっていますが、小さな群れのゆえ、どうしても限界があるのです。日本からの支援が必要にならざるを得ません。教団派遣ではありませんが、現実にはドイツでの通常の生活費の援助はありませんので、どうしても日本での個人的な支援会が必要になります。因みに、このことは、私のみならず、教団から派遣されている全ての宣教師も同じです。

さて、赴任までの決められた短時間で、誰もが経験したことのない実態のない「支援会」をどのように立ち上げたらよいのか、それは、それは、容易なことではありませんでした。そのために、前任教会の方々を中心となって、沢山の祈りを積み、同時に時と財を捧げてくださいました。皆さまの篤いお祈りと真摯な思いに神様は耳を傾けてくださいました。「主は人の一歩一歩を定め、御旨にかなう道を備えてくださる。」(詩編三七編二三節)という約束を私たちの現実にしてくださり、支援会が立ち上がってゆきました。

このようなわけで、一年に一度、日本で心からお支えくださっている方々に、感謝のご挨拶と共にドイツでの宣教報告をするために、日本へ一時帰国してまいりました。しかし、二〇一九年以降は、コロナ禍で帰ることができませんでした。その間、教会の金兄弟ご夫妻のご協力を得て動画を作成して頂き、日本でYouTubeをアップしていただき、宣教報告に代えさせて頂きました。

今年に入ってから、日本の入国が緩和されてきたので、二月二日〜四月四日迄、教会の方々のご理解と近隣の牧師先生方のご協力を頂いて、三年振りに一時帰国が叶いました。着陸直前、上空からくっきりと美しい富士山を目にして、「日本に帰ってきた」と、実感しました。入国時の煩雑と思われる手続もあっけなく終わり、支援会の方々から羽田空港で「おかえりなさい」と笑顔で出迎えてくださり、長旅の疲れも一瞬で吹き飛びました。

滞在中は、日曜日の礼拝と水曜日・木曜日に行われている祈禱会を中心に、説教、そして宣教報告をさせて頂きました。写真を中心としたパワーポイントにて、これまでの二年間の教会の様子をご紹介しました。活発な質疑応答の時間も与えられ、幸いな時となりました。



そして、日本の牧師先生や信徒の方々との交わりは、ドイツでは味わうことができないような、気づきや、悔い改め等、多くのことが示されます。日本に帰国してから分かったことがあります。私はドイツで神さまを脇に置いて、「これから自分が何をしたいのか」と、自分中心の祈りをしていくことです。今回の帰国で、「主に喜ばれる牧師になりたい」という思いが与えられ、再献身できたことは大きな恵みとなりました。

そのような合間をぬって、更新できずに失効となった運転免許証の再交付の手続きや、山積していた気がかりな事も終え、以前ケルンの教会におられた方々の所にも訪問することができました。大変欲張ったスケジュールを可能にしてくださいました神様と教会の方々には感謝でいっぱい입니다。



2月26日 高木教会		3月19日 大阪教会
3月2日 亀戸教会		3月21日 関西こころの友伝道研修会
3月5日 清水が丘教会		3月23日 西ノ宮一麦教会
3月8日 北九州復興教会		3月26日 京都復興教会
3月12日 小松川教会		3月28日 銀座教会
3月15日 浅草北部教会		3月29日 洗足教会
3月17日 日本基督教団西東京教区		3月30日 東京新生教会
世界宣教協力委員会	天門教会	4月2日 志木教会

お招き頂いた教会、集会等。ありがとうございました。

◇一月一日、会堂にて対面で新年礼拝をお捧げしました。祝会は中止。
 ◇一月二九日、午前一〇時よりスカイプにて定期総会を開催し、全ての議案が承認されました。新役員として金聖恩姉が加わりました。
 ◇二月一九日の礼拝において、足立真訓さん、幸恵姉の送別礼拝をいたしました。尚、ご夫妻は、三月二〇日に日本に本帰国されました。
 ◇二月二二日、四月四日まで、佐々木牧師は宣教報告のために日本に一時帰国していただき、三月五日、三月一九日、四月二日の会堂での礼拝は、増谷啓伝道師(オランダ南部教会)、矢吹博牧師(フランクフルト日本語福音教会)、コニー・シュテックレ宣教師に説教をお願いしました。他の聖日はミュンヘン日本語キリスト教会のズームに参加しました。
 ◇四月九日、イースター礼拝は、ブリュッセル日本語教会の皆様がケルンにお見えになり、一緒にイエスさまのご復活をお祝いしました。礼拝後、玉子探しをしてから、会堂の外で愛餐の時をもちました。
 ◇ブリュッセル日本語教会の岩澤アナイスさんは、スカイプにて佐々木牧師と洗礼準備会を行い、銀座教会にて受洗しました。おめでとございます。

◇四月から二〇二四年三月まで、加納和寛牧師(関西学院大学神学部教授)は、ウッパータール大学にてプロテスタント神学を学ぶために、奥様の美巳姉と共にデュッセルドルフにいらつしやいました。
 ◇吉丸和慧姉は関西学院大学に入学しました。
 ◇四月一六日、三年振りにボンハッファー教会との合同礼拝に参加し、その後、聖書の食事を共にしました。(当教会からは、八名参加)
 ◇ヒムブレリアー(持ち運び型賛美歌自動演奏機)を、日本基督教団・高木教会(長野県)が、献品してくださいました。
 ◇ウクライナで宣教活動されている船越真人・美貴宣教師の支援のために、教会から五〇〇ユーロをミラノ賛美教会を通して献金しました。
 ◇四月二七日、佐々木良子牧師は、「バルセロナ日本語で聖書を読む会」のズームにて説教のご奉仕をしました。
 ◇四月三〇日、佐々木良子牧師は、ミュンヘン日本語キリスト教会にて説教のご奉仕をしました。



◇六月より、礼拝は全て会堂にて行うことになりました。尚、水曜日の聖書の学び会はスカイプにて継続します。その他の集会は牧師までお問合せください。
 ◇神谷乗仁兄が、去る四月一六日にご病気のため召されました。一九八八年〜一九九一年、デュッセルドルフ日本人学校教師としてご赴任中、米子姉、娘の聡子さんと共に礼拝に出席しておられました。ご遺族の上にお慰めをお祈りいたします。

◇ お知らせ ◇

◇六月より、礼拝は全て会堂にて行うことになりました。尚、水曜日の聖書の学び会はスカイプにて継続します。その他の集会は牧師までお問合せください。
 ◇神谷乗仁兄が、去る四月一六日にご病気のため召されました。一九八八年〜一九九一年、デュッセルドルフ日本人学校教師としてご赴任中、米子姉、娘の聡子さんと共に礼拝に出席しておられました。ご遺族の上にお慰めをお祈りいたします。

◇ 予告 ◇

Strassenfest(教会通りのバザー) 六月一八日(日)

場所: St. Stephan 教会

ー時一五分よりボンハッファー教会との合同礼拝後

◇六月七日(一) (場所: Nürnberg)

Kirchentag ドイツ・プロテスタント教会大会

◇ヨーロッパ・キリスト者の集い 八月三日〜六日

テーマ「キリストを宣べ伝えよ 集い四〇年目を迎えて」(場所: Schönlick)

◇編集後記◇

今春は、不調を覚えていた姉妹がお元気になり、そして、日本等に一時帰国しておられた方々が、皆さん戻られてまた懐かしい再会を喜びました。いつものメンバーがいつもの場所において、一緒に礼拝や集会を守ることができ、幸いを噛みしめているこの頃です。(佐々木良子牧師)

発行: ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会
 Japanese Evangelische Gemeinde
 Köln/Bonn e.V.
 <主日公開礼拝>
 会場: Dietrich Bonhoeffer Kirche
 住所: An der Decksteiner Mühle 1
 50935 Köln(lundenthal).Getmany
 電話: 0221-430319 (礼拝前後のみ)
 時間: 毎週日曜日 14:00-15:00
 <牧師>佐々木良子 (Pfr. Ryoko Sasaki)
 牧師宅: Breslauer Str.26. 50858 Köln
 固定電話: 02234-9298792
 携帯電話: 0151-2910 6278
 E-mail: r310130s@gmail.com
 <ホームページ>
 http://koelnbonn.jp
 <振込口座>
 IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38
 BIC: PBNKDE33